★講演会報告★

星実千代氏講演会
［現代チベット語ラサ方言の発音と文字の関係について］を聴講して

望月　真澄

本学言語研究センター主催による上記講演会は、1995年11月29日（水）午後４時00分から同６時00分まで、２時間にわたり、20号館311号室・433号室で催された。山口研究センター長のご挨拶をいただき、司会は望月が担当した。本講演会は、本年度発足した言語研究センター計画組「漢字漢語の諸問題」推進の一環にも組み込まれるもので、当日の参加者は中国語学・日本語学などに関心のある、本学院生・教員を含めた研究者であった。

チベット文字は、極めて複雑な構成要素からなり、それは元来、サンスクリットの綴り字をヒントに考案された。このチベット文字はさらにフビライの命によってラマ僧パスパ（1235－80）が蒙古文字を創製する時の根拠となり、さらに1446年「訓民正音」の名で公布された音標文字ハングルにも多大の影響を及ぼした。　文化功労者、河野六郎博士は、昨年から本年にかけ「文字論」「文字贔屭」など、文字論の原論的著作をものされ、言語学の一環としての文字論はもっと重視されなければならないと主張されている。

今回、その令嬢泉氏が、また東大博士課程でチベット語を研究されているという星氏の家学ともいうべき一端を、Ａ４、13ページにわたる両氏合作のプリントに基づきご講演をいただき、内容充実の意義深い催しであったことに、聴講者一同感謝している。

〈編集後記〉

「マルチ・ラボ」が設置されることになった。マルチとは映像、音声、文字の三位一体による語学教育という意味らしい。今回はこの特集、というより、マルチ・ラボのためのNews Letterとなった。

在外研究員としてＭＩＴで研修中の保崎則雄氏であるが、推進役から転じて、詳しい紹介文を寄せてくださった。鈴木広子氏には、保崎氏と絶えずＥ-mail連絡をとりながら、保崎氏の原稿を加筆訂正し、図をマッチングさせ、全体像をまとめていただいた。学年末、入試の忙しい時期に、さらに導入に際しての打合せや段取りの煩雑な仕事をもこなす中での玉稿である。

堂はできた。文字どうり堂に入ったものになるか、はたまたがらん堂に成り果てるか。ひとえにソフトである外国語教育に携わる者の双肩に掛かっているといえよう。同時に、管理し運営する側の責任も大きい。となると、外国語の教員で、言語研究センターの所員である者には、よほどの覚悟が必要とされるようである。

センターの創立20周年を迎えて、昨年度と今年度はいくつかの記念事業があり、センターの改革を考えた２年間でもあった。記念の大きい企画だから、あるいは20周年に当たるからというようにスポット的に関心を寄せ尽力するというのでなく、不断に、平生の精神で、しかも情熱を持って、取り組む姿勢が求められる。本やビデオの使用状況ひとつ見ても、センターへの関心、協力がどこかへいっている感が拭えない。

新しい皮袋に、ふさわしいお酒を、みんなで楽しく盛ろうではありませんか。　（Ｍ．Ｔ．）